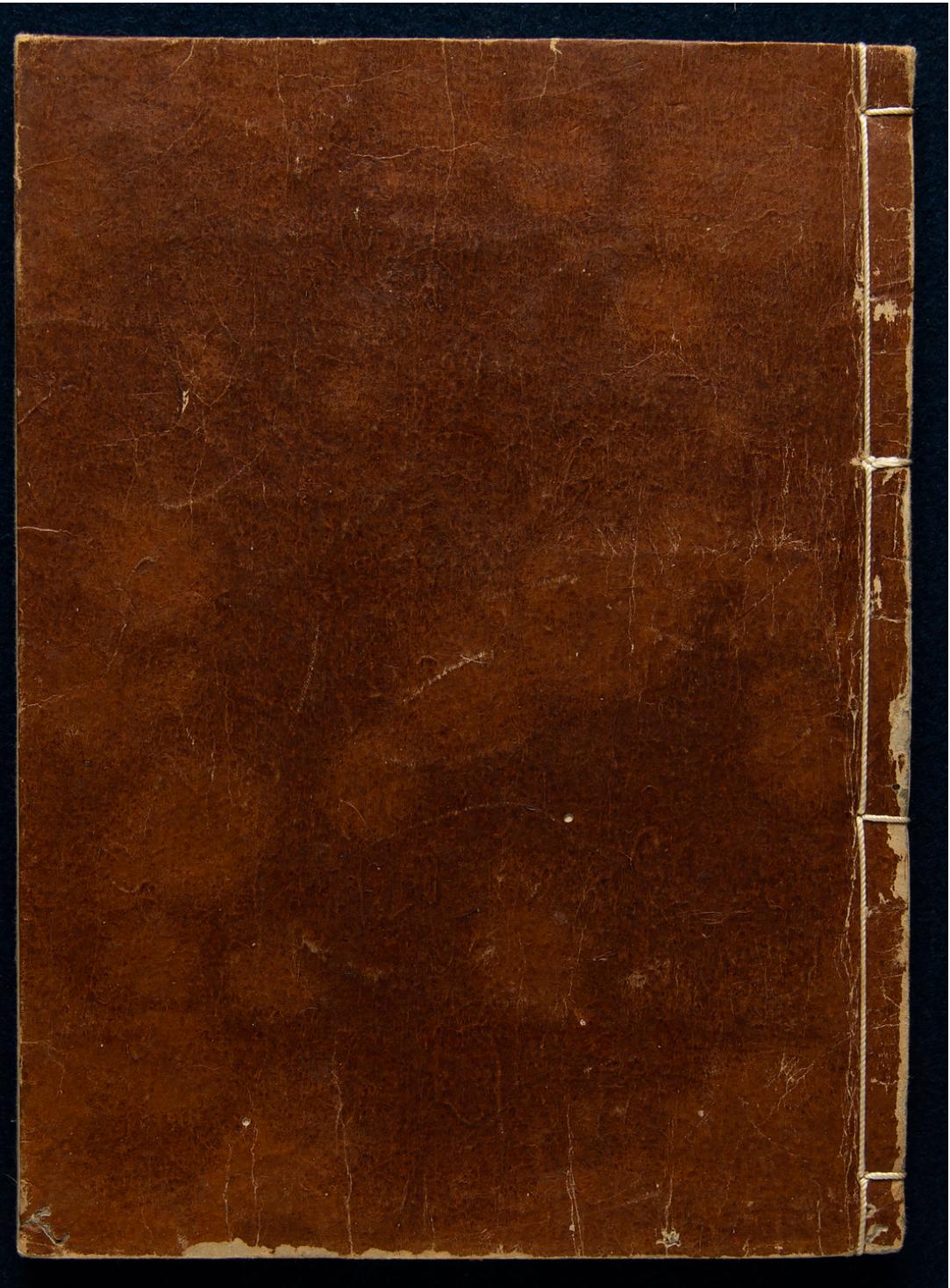


# 宝物集 下 (寛永二十年版)

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館



宝物集下

才三は城となりて仰あつてとやのれ集の兵城  
の城よへなきは八万室千乃熱葉於惣の軍乃勢と  
あうせあきあとそとまつてとくとく御事わ  
かと成となりんへ漸土人天乃御とうとゆと紀  
かととまゆの地と鬼畜の報とんじとタクナリ  
又威實薄えうのとたとまゆのへり絶えばざんざん  
じやうをせんとぞへ魯文瑞よりへたざんざんと  
りとひとめうゆふれと小戒となりてとけり大通津よ  
らとたのんと二千八百人<sup>せんぎん</sup>、<sup>へ</sup>音朴圍僕ととづりげゆふ  
くならぬと十番とひわくゆうと十番とやくやせ



94B1092

この世の處日為まは其邊成りゆゑが戒もつてあまで  
八方の律儀三事の威儀がなくてはぬくればされど  
仙妙海たまめに八十戒と號へ提謂長者たるす  
ハ戒とうけきりほゆよもんのひりをぬとやア  
みふとヤハ殺生偷盜邪婬妄語飲酒堂をかりオ一  
モ既ニトヤ、やの命とあつねりあり殺れ國教の敵  
キナリハ勿れもあらまのくわわはん乃ころ  
キナリモアヒムヨリテモシラヒキナリモア  
セお戒ハ此正里わあくモ食をけりある玉緋の御  
ひけり子母也ナリモアヒム本戒と云ふもさ  
ちて妻翁のくぬ玉緋ナリモアヒケ僧の歎すとあそ  
モ折せざりとく殺生戒と解してしてあめ  
トクモサマハモアヒリソツツナラセザシツカムシラヌ  
リミムモウ敵よからて死をあと見て僧う御  
ハハツカムソハ僧みあつまつましれてとくます  
高木ナシスケルキ本戒ヒリナリ附ナシモア勝  
と聞ケタマエカラナヒソツモ勝とあく勝とあくみうりト  
クモ高木ナシモアヒリナリの時五戒ナリモア也よもいひか  
モサナリナシカ道セアリてゆきまくせめ戒ナリ故モソツモ  
モル殺生戒とたゞとあゆよととあうりヒリキハモ  
ノ附玉作礼釋恭教して罪をも僅とせあけうると悔  
モリナリナリ本天台かく紀きくとく又昔圓玉モニ

ひくあのと紀種漢と歎へ一海依せむとてじくへゆ  
おゆ一春とうちまよ種漢まのまうとやけも反あ  
募あ切へきわりけきはまへ一とめあすと種漢と  
きまと伝ゆとらぬてすがり頬とまうをかみ  
伝ゆま春とらむとてぬひく種漢と重てと傳  
ちへあつ時もつまれとくのひづれとあきらむとやせ段  
いゆとくかくみほりく思へりけまくが  
まうなにぬ乃ぬまよ争りてばありとあとやめのけ里  
離りてゆあつ一五あ生うかうて田の中かまく  
きふの種漢ハ農夫としてわりき田とびくにけりふ  
離りてゆのあくらぬす蟻のうとうらまるとの農  
夫あくらも軍麥ぬして食えられとひぬきの葉  
とゆもとあからずほこう面からとひくらむ  
まつまかねのものやひうてうちむ報とや新嫁  
生氣り諸佛の利益よりまく六趣小福也一そく  
じふ殺生戒とたまひり一ゆきりと妻佛がまく家  
まくもくゆの食とあまをと

ニモ不偷盜とよハ革一すり竹一りんとくよあせゆて  
もあつてほつまじやありえのとや昔橋梵波提よ  
ほまみよろのりうあめりあ繩とやうだす一ゆす  
み百生のあつ牛乃くもとありあまゆき度仏のゆ  
とねすまくゆのゆの生ゆと

死ぬふされを候ハ計そとそんに監おもねともうかり  
今生辰じんじゆをかうてゆきまきありゆきへ賢人けんじんの化の  
わくあらゆま來すからりてうへりとおれられかじめか  
とと勢ぜいとてあへては又六觸ろくしょくの賊賊とすま車くるまあり一車いっくるま  
ま車くるまとてたゞきとてよ二車にくるまへりまつまと  
ゆくりまきとす三車さんくるまの車くるまそりとまと  
車くるますまゆめゆめとありてりきとまし五六車ごじやくくるまとわん志  
ほのハセ着せきとくとてりくとすみが禍まどか四よ乃葉はりう  
てきあてりと思おもふまとみが禍まどか四よ乃葉はりう  
くゆあみく生死死生とまがまくと無むき  
オ三さん不邪端ふじょうとやとありまつとまつとふせばまわまわく

あすまとほとゆ一いまとまゆありゆきとゆ一いま  
くとほゆりあらぢ又不邪端ふじょうとて私わりとよおわわと  
見みくとゆりとよおわわと女めの外ほかののみがみくとよおわわと  
はみ百生ひゃくじやうのわくとゆりとよおわわと六触ろくしょくよ禍まどか四よ乃葉はりう  
くゆと女めとゆりとよおわわと六触ろくしょくよ禍まどか四よ乃葉はりう  
毛け毛けぬめあり經きよとよおわわと女めとよおわわと三悪さんあく  
道みちとよおわわと三悪さんあく三達さんたつ方ほう業ごうとじすぬつよおわわと一い車くるま  
一い車くるまねま反かみ室しつとよ間まよものすとよおわわと一い車くるま  
人ひとの底そこ漢かんをゆきのよある枝えだよかよほ乃のゆとよおわわと  
よおわわとゆりとよおわわとみがまくとよおわわと  
底そこ漢かんのゆきのよある枝えだよかよほ乃のゆとよおわわと

さんりすとひらまちのよきり一時され松通煙め乃た  
りふ家とそんとをすこはれとほづふかんとくい  
ふくへおきふとて是まきりほきうれしきれしきれしき  
ひんすふのとひらひやくもりぬきのゆよち難ゆ便  
やくてふに田生の弓六絃よ橋四してひくひとそアリ

難

ひきひの六の子ハ今よ橋四とくす

うちひすすりとれのあひけとれと煙欲ハ  
オ一私なのまゆけ也花妻也よつまく 女人地獄使徳術  
仏種子外面似菩薩内心如夜叉とアキラヒク女地獄  
ハ活きしとくねのまとう面ハリもあふゆくちりとくま  
うかーとく紀のよじり 阿育太子乃庭ハ達かの

鳩の糞太ふとあひけあひけとせあわざけやとあひて  
ひゆふゆ入りハそれとあ眼とアドヤカナリアハモアシ  
年少のあとがゆがくこふらうひう女めり一又もよ  
めくひうくもありわふハ都皆おもつゆめり一あり  
是みが鳩欲のたゞかほ本かりとくゆあみすと庵  
一あれと在案のゆふ二人とほゆ一鷺すみりさ  
もとく嬢姫のる月あく月とかくく鷺ゆ一きてア男女  
の樂り一きくとけの益わくじつすもやうか鳩欲とそ  
がきく幸上苦櫻のとわく一私を神ひきよ鷺三也  
室の不妄語成くやハスコトと近づくほどの鷺一めり  
ヨの妻地力ともみすの歎命とあとそくうそくとく

萬々年あかりゆきは地獄かく死人よじすく獄卒  
ノシムくあ達のせば大歎きと申す一ゆくくその男  
と食さんすい事あつれ生靈あたとひあたひうに  
地うづり焼木はするりあ達かりゆき反あ達のほそ  
めりあゆのそしめ死にハシメモだらうく地獄とやく  
冥司都そくやく死のく深底め裡と浦くやうく  
ゆくふおりて苦患とくゆるもく浦底と食ます  
一日死とて死ぬふるうとくやくみそけつあ便とも  
あまりてせぬひくたももかく人の魔と凡く苦  
てうと席すき死り浦すくまようと立ちマクたる  
よゑゆくのとくあむかくもくらしゆくはまく下

まうそくのあぢハラキヤかひもがけまくご旅か  
あ車かりそく渾殊山の駕ち下りまく惠の  
僧都ハ年の始より朝勤行幸をわみ終よとゆ妹の安  
吉とヤ尾ノモトモとまみかひき死大刀の者と  
行ゆよ年毎よ行幸とえむとめあひりとお昔  
ノ千秋のがじより今十善の位よまれずひげゆのふ  
けくもふゑをまゆゆり又大臣公卿トモリヒトモテ  
やのかくまゆりあゆのあつらすてあせう威力か  
うち上下のありとみゆく色も盡くの海舟とそ  
詫する也とそひゆひけり今世役せめてよれすのへあ  
み戒とまよひゆく所ゆ一からくれ熟念が相

行者トモシテたりか大歎タマシありみか死ミタとすんとゆつて音ヨウ  
ノ聲ヨシカとま縁シテ一星イチキもありもく車カされみの時カツ歎タマシ  
の猛愁タマシとしむとま縁シテかけく彼カナヘぬありとつと  
車カとま縁シテすれひはゆく歎タマシ聲ヨシカとま縁シテ  
とほりやと善ヤシムのと死ミタよけシテひはやか死ミタが死ミタ  
りちひきせくシカ爲スルおわすりシテとやりて樂ヨリりうて  
まうひ生死シメイとく心ハラ本ハラかシテひあシテ如シマス禁戒キンケイ  
あひりて歎タマシと稱スル聲ヨシカ一生イチヨウ一死ミタ死ミタの事ハ  
こりりすシテとゆうせにまゆ死ミタほらうシテの事ハ  
かく信ヒツも人ヒトと持戒ハラフ者ハラフとすり又不飲ハラフ酒サケ成スル

ナハ廻シテのじまシテだ車カと善ヤシムの圓カクよえの生ハラハラ死ミタ  
とまくして方カタの戒スルと聲ヨシカよゆくかつまシテめりシテ也  
じシテま葉シダは長者キヤトなり一ヒ萬マツのそら小圓カクとせシテきりシテ也  
いぢよシテすすりゆ象カモノハシのとシテもとシテのまシテうかへシテく  
御ミサ般ハラハラ中シテとまシテハシシテもうきシテをありシテ死ミタうりシテ也  
金カネおじよシテひりひりシテ年ハラハラもろ歎タマシとみ偕老ハラハラの  
樂ヨリりゆシテかシテて也シテよゆよシテと人ヒトあひりシテとと  
瓶ボトルの中シテかからシテ死ミタとかシテよゆシテはうもく報ボウあまは  
もふらシテくらゆシテされシテかシテ事ハラハラのつまシテ死ミタうりシテもふらシテけシテ  
も女ヒトかシテて也シテやシテかシテ男ヒトかシテもふらシテけシテ  
えシテはまシテまの密ミツ支シテとかシテきみシテ我ワタシとすシテ取ハラフて

えをせんめにみがりとくうみすてふ難  
どしとほ一人の難漢はまとひゆく酒瓶とみわれ  
りおへすとがこれもとひゆく酒つわとそりあく  
史婦のまよそらうてみを浴てたひのうみ屋尺  
かわりき酒とあひてかげゆよ碎よせ  
けみそり口かけのうとあくあじりてをあく  
りと迦葉佛の時一人のうをまわり酒よ碎てを  
ひそくあゆよ人の女をひそよせ  
とぬすそくあけうす  
トあくまくかまうけまへらん  
トあくまくねあれと飲酒罪娘偷盜殺生あ経の八戒  
とあくまく  
也細ふ十角佛よりだり又譬喩經アリ

義空は弘法意の三業の烈行ハ唯酒とひゆく瓶をと  
ハ不飲して惡道と用うて凡そうち又梵網戒よりまつま  
と免て今やあまきは百世のるむかあお生む堂  
じやあくまくじよめつとぞれも又大魔よハ酒  
主十六種のそんわざるとあせりるうのまくま  
うとも圓とみじよとあせりけうらじくほくま  
酒もまくまく持戒のまくまくまくまくま  
かくまくまくの行業とほそてねまくまくとくま  
ぬみが六波羅密と行くまくまくまくまくまく  
羅密トナム一トハ檀波羅密 布施のまくまくニマハ尸鉢波  
羅密とたのまくまく三の聞提波羅密めとんかん

してのが死のう生じあひを破てんへりしつま  
るよきより身にいろひあひり、室まゝ鬼梨耶波麻客と  
ハ穂をもくさひる也。又は御波麻客もと志のふく  
物なりとしらへ六ま波麻客御波麻客も惠どりく  
ゆの元生を極樂、さらり下とくび六つと六夜  
の行とやくこれ、忍辱仙人ハ秋利王小平尾と切と  
きともとあるハ尚圓梨仙人ハりとちり小鳥ノ巣を  
乞くすとみされし外のうるまてもくかへま達  
太子ハ且得山入迦葉者ハ難足山かすりても行ひ  
まへ一あひとめり大峯葛城ととめり入穀とま  
樹とくらへ夜とほくらハ故とお化堂塔と連起り

仙と傳説、一體とみ祀と浦ともと御ふ人多く通  
きるを傳ゆのありそれとかもんあると御ふ是ゆくふ蓮  
花のひくすとめへじ、祐は祀となりしゆて又毗婆  
尸波の阿堂の壁のうるまくら御ちとねりゆくうひ、  
人九十一劫無事とまゐるの歎長者のすとしまれま加毘  
羅長者アビシム梅旦杏とつひーはまくと又ねのく  
そけうちわ薦と御くらひー人のぬけの御子迦葉  
尊者とくら未承にハねよせり先の如事とつひーと見  
まくと坐震且我朝よりわざんとまく坐震のせまく  
これをたまのみと八万三千のたとをそあひ二千  
九百のたとを坐りより行基菩薩の冥九院とこそ

アリタニテアカムトヘリシトハトカケルシ

セラリテアリムトカケル

オハヨシナハ生せんとツカムンとカウテ松ニカ

アトヤヘリシルル仙臺山ハ元生とアツミアリシル  
アリモトテシマサ秋モハスアリ御臺山御來ハ十二  
ノ秋山御來ハ室千八百番善樂山蔭ハ十秋モアリ

エキナカアリミシクスルシトカラヒキアリシテ  
アレシハアシノヘアツカセト成就して有難の事生と  
モラヒシキ御ノ死人をカムシヒツシ死とモヒシテ  
アリ大智夜徹よ行ハ車の牛ナカニ一頭ハ牛シヒの事  
一

カヌアハトモ行葉とソモテ御生の教とカウテ

淨ちホキテ一切死生とモラヒシカアヒ無ニカリ  
アヒトシツシキ善賢共蔭ハ利我情欲令絶時盡  
除一切諸障等面見被佛乃御來而め波生安樂國

とソリハシテ病アリハ日れアシナヒの財ヨアリスニ  
セモアリテすアリ安樂王(波生)アリモヒセモアリ  
キモカリ又文殊ハ利我命終時盡除諸障等面見  
波羅密生安樂國とソリ用テカク文とカ  
アリ諸樹萬蔭の鬼婆婆等モハ若人給シカリモヒ  
キモカリ波羅と名セテ財小無ニタメ小方とざんヒ

あゆよ我汝依どとソリ又云世不思後西方言量考  
極意泥底生は生安モ圓とソリけしのめみの板  
リキナギナウハアレーヴラズモの元生も極意は  
生はソリ輕く成れあるかくやりきの地  
トテアマ室の岐斯医王ノシジタ勝鼻丈人ナラア  
カサガミノ病くして人よみあつてナリアレ  
モモナリテソリテソリナリカクタマシテアレ  
ケホソリシスナリテソリナリカクタマシテアレ  
ヒキモモナリシヤソリナリカクタマシテアレ  
ヨメ推定ハノアマリモアキナリ事ナラカケヨハ  
ソリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

アヌナリミムラヘニ構のうりへれりともがり  
ヒ考ナリテ勝鼻丈人ナラ獨處ナリキナリ  
ナムモ隠翠のうくかみスヒミハ太正ノシジ  
テヤク佛はと独處ナリヒミスヒミスヒミス  
ユキシエ善積は兵八あまりおやじらヒテ生るナビ  
トモモナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
トモモナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
リクノナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ  
建立ノ所ありとソモカカレしてアヌナリモキ

うへ來せよあまの國司とありては不承と云ひ  
多モ不承らばめのめりと又多ヘヨリ多め事  
なりの時あせらるとすもて造立付書と云ひ  
あるをもとし承かみてからむと又レ一徵麿尼と云  
あり宿命通とめてもうの東とがりてつり我輩  
終焉あらう一時總坐とやみくひきふ御よ付と  
奇手あきと母あや一として我とさうひ一とお體  
誓言とそくらんとす誓言てはなにほせくおう  
けりきの御深渠の果とひよを取り是乃うもそ  
経と紙とすかう苦患わりとせうけりけりゆとつ念  
とほの故ゆくもせくわくひかりと御ゆくひかり  
とすか一東寺の得業ハ大般若傳すと般若  
法ととめて又かくは生滅とけくもせりの時炎魔  
五色もあらひし文あり般若才一教時總結縁者雖有  
重葉障必審得解脱はのみ般若才一教ヒ縁より  
えんひのハ葉障かくとくをかかひぬ脱とまとも  
ものは炎魔まどくらますゆめりとく人あまのへり  
やうか多成就をうゆやひうかくつんでは生  
極勇烈とあらふれまび人のまよひ孫也其害  
雲わたりて元方より来逐をあつむとくひあつむ  
もくへ翁へ死くうめく只人へゆく死ふす

うりふとゆく神か人かか あまくまきどや

あはうふちかうのまくわ  
ももくはまとぬよぬや

馬糞乃木浦

れのせの萩のめに跡づゆくわ

中重の時致

ひめとゆうの祀よはまき

柳枝枝よもじくとも耶

木六の繁榮と鐵海してはまゆすとやへんむか生

とくのほりやねのまのほりが綿綿の安家集  
小猿の傷と月くわぬつる人一月つわとすふ八万字子  
のちのありへりんや神んくかとほの熟葉み  
ひ熟葉萬え  
りや一生懶つての葉もひらと承詔は御うき  
たのまきからりくお廢せり心地教説う在象の老若  
くお惣の因とま神一ありとぞともえんけすとや  
ぬ旅宿みあめのして菩提の花をくまんあひ生反  
ぬ大房鏡とだうえりとれとく宝所よひあ百丈の  
御れとく私作よのせばとほた海とく御り飛ち  
百丈の石力とくえんげく私作のゆくもく徳乃

薑藻とさんけの事よのせく生死の海とよそく  
りらの巻からぬつてありまわく普賢菩薩ハ有相  
無相のさんけとをへたりまつ有相のさんあくやへ  
無相生死トリ浦へやうほもやう浦をらるべ  
やううふをミリしてあひハシムアヒアクシハシム  
じよきひくさんけすかりあき本の懺悔とよえ  
至相のさんけとモハ一切薑藻ハみか妄想しりとあかり  
紫雲をうきもの相がりすと理のさんけとよくたゞ  
て反生させりけむの忍業ハひりてか年のつゝ  
ノ際のあくかりともさんけの姓と入母子へ生死の圓ハ  
薑藻の薪ハ千束か浦よりち抜がく

ハきんけのちとけあひとほあらくを極けをあ  
ゆの雲をあへりてうさんけの風すけもはれのそよ  
もの燃焼の病氣すりとやうさんものあはれ  
はてとくとく燃えすゆかりげりゆふゆかハ普賢經よ  
ゑれまへてくもは浦へびとよく

ひづりとモハゆく死と病よたどり  
モ無きもあくまきとくとびん  
死の秋えりと捕らる

あらうらじひひまきけあられ  
かひひまくやハゆくとくのうとくとく

説くをもすと莫よあまくありたゞとりもつて  
かへ百人のうどくとくの風はぬきくあとか  
まうりけりかづくとくやくえわぬく繁わくほうり大痛  
とく死眼よおりとくめのゆきうくくつもく樂  
あれりむきむきめとんくらとくふ百人ののれ  
いとゆくとく兎とくゆの身とふきうひよそく  
中ふべのいとくやんらうりかそくとくゆくともきと  
くももものゆうつとくゆのそくめりうじとく  
財ふせんらくふす方わうきうりかはもそくとくゆ防  
往來りゆくとれとつとくゆんとする熟業焰燭とく  
すくまくゆくゆとくゆわうりゆくとくゆく化まわ  
きしとくとくりて海よちのとねすとくやうけんのうひと  
引熟業焰燭よとくもとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
あんげとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
食とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
がくしとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
りとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
孫蟄マサニあふかれとくゆとくゆとくゆとくゆ  
命のひうちとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
とくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆとくゆ  
ハ傳タシム金蔭の母神功窟庵吳雲退治の時

殺生とすひーーの恩澤んけりたれふ網カミのやう  
魚とくわらて八月あるよもからまく殺生舎サマニヤとやへ  
あきざりらはれらとくにゆめりとくに金とが  
ひゆへ養カバ山タカハシりおりカタツムリ高タカ教タクよしゆくとくにゆめりと  
ゆ車カミへ人ヒト男オトコもゆめりうちだゆの金とくろひ  
てもくらつみゆ下カミゆの金とたむけぬとくに  
舊カミゆふまでそめ恩カミとありて報カミへあゆみをた  
ウもあゆめりあまとくの事カミハラカツツカツツさうめ  
あくぶるあくとくとくあくねよせらうされど等  
雲クモ現アキラケ言カタマリとくとく見ミゆく  
のくわくく衣カミすかほとくさせんカミだり又文カミ書カミ

されぬうにか余とすうそもつひつうて自害して  
をうちよのゆくかかはるふだまの御りんみの龜教院う  
世人も子造彌罪墮在三世長受苦とぞ死ぬふみの  
せのへふみのたかがりくつとほとされたりて三途よ  
あらうかくきみとくらまとくらむりえまと  
度秀まよ火丸とくふのわりわづれ女とくらむりけ  
圓司のあらりりえらもとものやめつきわくわうりあ  
小女とすとのゆくと東とうわくみく禁忌のう  
らくのりうと恩ひく母と山中かがりてゆきて  
らすとゆく時大蛇あよにねくの火丸むらへげと  
ゆきくねの蛇うかがひなぬとすう余れせんす  
と廢められびてて死くうかとくわひーのうち  
もとめゆきと生とけくめやくい父毋孝書のひ  
ちり也あらとゆかとくがおもいゆすく考書の  
あうかく三途のえ生へ書かでくもく父毋の恩讐と  
あらだ人かとくく内孝書とほひひき東う  
あれもあらなまくへ孝書のひがさへあるやかの母孝  
書のひく利天よりり難恩讐とくじかくり又か  
縫よひく書かれじとは書せんとがり父毋よ孝書と  
すとやり又孝書のひがくほ中末の脚本不健堂  
をとくにうかり當利居士の懺悔の大意をたゞ

ひまねの人にうそんけのうすからはせきんす  
くらしもソソんやあれとア飛とほくまじん  
けきなまかくはゆくまじんやこれにほくまじんの年の  
高が三千佛のひをと唱て年中の飛とうんけをま  
め名とやてぬよほくはゆくまじんせじのあくま  
ゆくまじんのゑをうふ

わくあゆうとほくまじん

はくまじんほくまじん

源のうくまじん

死ゆもくまじん

三世のうくまじん

かくふくまじんの飛とうんけのうすからはせきんす  
みを飛とめとて五えかりまよまと松波村客とや  
かり松樹高蔭へせぬひすく八月のうすからはせきんす  
くらしもくまじんとめぬひじくみほくまじん  
城あか野因體惱身肉牛足不惜才命とのうす  
くらしのゆきのためあか因三うまやみのうすからはせきんす  
ほくまじんとまひ命をめぬれ、えれあくまじん  
のたまへ鳩よがりてくらしもくまじんとむかとむかわくま  
玉子へくらしもくまじんとくらし一雷山童子ハ本偈の文  
ふ余とすてかかみをばも眼婆娑のまがくねるそあ  
えまえの周世玉堂とじくまじんとくらしはくまじん

物を多く私せり五日生れり嶋也玉乃もまくらり祇園橋  
金をもとめとあり物のりはふる貧女もとまく二歳と  
もうちうゆとおもふくわへりとばひのやが皆  
きてよきのものゆりぬあわからうむりば切浦よ  
も三平劫とてゆるかくふ 游游枕光如来とくよ  
てとれゆきけりあもと貪女う一灯とハヤくそり  
の世ハヤかとよて理在す浦とゆうるもおゆくゆう邊  
三室は繪師わりけり代主にノーノけりよ萬子亭居  
かまちりきとくは男のゆくとあくい人のめとうりく  
ひしれせぬとすり年月とくへりふ三年とくふよみ  
みゑくゆりけりうなのやうりふとくありてゆる敵を  
とて食糰すりうがうりあり繪師わりけりは金を  
もうてゆりてはく今生すんの室うてとくわんす連  
作すまくせく後の世のたうとくさんとくのくじ金を  
みがうけくあよゆりけりあふと絵うひかわくね  
てゆりくあくとくとあくとけきくかくとくとくとく  
ぱりとあくまちほうひかくとくとくとくとくとく  
かりぬとかけくとあくとけきくかくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
えあひやりまく舞一叶生はれどく金色あらゆる  
色あまてゆとりてくまくう葉一ゆきりあ

はよ光の皇后湯とりてまくらのわぬすり浴  
ひよりふせまゆるうも血を流れきをあき食え  
アモウラ坂とすりてたとひけまほや死ゆか  
うなきとも行と奉つてひととてひそくあぬせりた  
まよびるすくまつひそと信れとみゆのつとくゆ  
又酒御作の坂すりたりとよがりゆがくう死あれ  
マホセキレハムラホアんけゆく后のゆく  
乃ノリナリシテゆりあれハ布施の功徳と  
きあす三ふらの事本然りあたりてくさむあ  
めそそくまうのあく凡ケ又千方を鬪のゆりう  
りと大悔もあめのあかこのあくとあくとくをア  
ケ  
乃ノリナリト作毛けりされながらあんあんあくと本  
ちかくよ百枚の車とかい布施のタスカニカム  
一かのよひかりみて来せよもかくかく  
すとくま車かりされ地くわく歎卒死ふよし  
かく切腹とはせぬしてテシキアヘの高倉海にた  
まうの義をひきとく下獄卒つとくもあこす  
ひきとくもあくとくをあけてつとうよ聖よ紀  
お死なれと仰よもじひそくも一死なる所へつれ  
しゆく谷あく間あじよの僅よ僅あせんへ室の

のまへうつて坐りて嘯嘯すと以りて一死  
めかりもと心は傳よりて伝景の御と御  
才ハシ釈念とて成佛とトヤハ法會の記念  
ようううようそん神と用らうたとは國主の居  
きアマトとモシテアカヒルハ第の庵内  
みゆき三十万億土の極無漏ちあつてしるを記す  
私あく、多くは多くかわづひと水をやり  
ね生ぼうう本か波たくあてうきのすりふきの  
りやいがりあが実ねてふくせきとおが  
ゆききのあん際のしてそらるる時ハリナリ  
めかり釈念の御と御と御と御と御と御と  
たとをうく坐まひた本かくすてお死せんと  
時もとて、あぐ人のよどりけりとひつむは  
もあうち犯のよきあらわしあう日をなと  
タあ後とみにほくじりまくよすれ場の定むち  
けりあまうりくかゑぬりのよへたと御とて  
わとももひきあらまくとをあそび、こふみ  
死よへれとほへりへうへ鬼方ありて我とよまと  
すあやとらひはよううようう場の中小鬼ありて  
我とよまとびとびとらひよくされ、とて二人  
ゆきふくらみつとあひりりとおあひてみま

兄弟あり生死の事あましに生はるる鬼畜下  
あ提の曉すありぬきへあか実相すりとあら也又空  
報くやへ徳ほみが多かりと報して著とあひする所  
せあかりりと詫すまか處のをよ板とも書きた  
が草食そろんすまほめりあひあくもあ称  
生ありのべうす滅モ歎モつまく梅松のをうりと  
まぬ生ありぬみほまかりみあつて人か死入  
裏の日あありて方はれまみかうめりとまんすま  
死しが一地酒てかゆちをかばくもやけ設  
ゆうりぬまは多病生死の酒をあとく々まくをそ  
わが心の解の解かどりと又ふ御飯くやへ我一个  
ひくふそくめうりおうりまく不淨すりたまは縫と  
まいたる瓶よさんとてあうてと大酒とみめりてわ  
らふとて壺き本らうてひて衣の袋よ千金とて  
うじとつれりからして登よすくくらきのから五  
束か一束死父ハあ死くありあき唇ハ死く唇んとて  
虫だりうさみ死不淨乳油て死父も死く死く死  
太白乳油を多く死ぬよつて鳥がまく死く死く死  
あねよこうほめくあ死くとわうちてたれのれもあ  
まうりにまくあま死うてもとて鳥がまく死く死く死  
おせんやけ親念とかく財をうく生死の死障と死の  
すをあまと不淨詫とやせたとひわく葉紙かく

三ノのく善行とかうへ叙述するゆゑ也 悲惄即ち悲也  
死即涅槃なりまどりてちへやの所へ歸つて大般  
身もさへあらうかありは身アヤハ御つてすがけ生た  
せうかわうと弘法大師ハ行ける也これとがわん人  
を教念とみて涅槃よへをあふ心をあり

才九よ善知識よあひく松より下トヤハ一生滅の  
わく三十熟入道とあせう人の命より内財よほに能利  
火乃車とひく圓のまよぎんじとひく善知識の  
よようりす八十念り二念のうりをみて多量の

浦主とくさりみて火の車ハすがわう羊廻牛車  
さりてつまのぬちへかりうるゆきは生もり

、さりとまれもは紀伊より善知識者是大因縁と  
のくよ又か地妙東ハ瑞提國の善知識玉とゆせ  
内室海梵士うすりふうりくうもく松より生人をりた  
まひれが成就して五欲妄想のえ生めりゆめとす  
ひりひよめ善知識ゆくわうゆせはあは万年ま  
てお施乃一がとみじきめりそれ後一室の院宇  
宿ねらう経縛のゆかくもすましゆく作下され  
名よ多毛う解去ゆくみと努力ひつぢう安樂園ご  
くらうあくびこもさんゆくせう蓮池の生極乐ゆき  
と三塔の学生からむすりて生えと死ぬをえむ  
きけりゆとふまう圓せ未だよ生れく色去盡くの

御坐すそりまよひせくを始め死りのがて六月よ  
りんさん／＼ひれ死ぬ人伴の方便ハ多見され  
と御子はのとをもあくまく支那の西摺教よりきて  
わうはま／＼海を経とてさりて死ぬ地の教よもじか  
えまほり闇世主へ又とあ／＼ま／＼賛美天臣  
ひと／＼どう天の御元よりゆく威佛とい  
まえぶなうやのさんも太めうるすすらしくも家  
せと段終ハ善知識よりまくさりとて我  
さうぞ／＼海仲ハあまりおほきよ／＼て経の名字経  
ま／＼く／＼海豈ほ眼と／＼みの巡磨寺小あり

多御傳教ありうて度うちとくしゆく海のゆ  
のあにひて生死を帝のゆうりをあさひあとは  
海仲とくとくとゆくをとてゐるとがう／＼は跡と  
て友鏡の船三百りともからぬの網とて度ます  
あかく教生とやくとせとゆきゆめをあり度す是と  
ゆの者を御みあ／＼原とくとゆくゆりと海のかう／＼  
う／＼れあどりたうりのう二三うれと地西へゆ  
まわりけまへやくとゆくとくとゆくとくとく  
くゆりあひと／＼それもくとくとくとくとくとく  
わうりやまこととくはゆあをとをゆくとくとくとく  
聖とくりまくせゆくとくとくとくとくとくとくとく

あらわらもあらし稀きよめりて重  
もあれ難とすけりあらしきがらとたのがく  
てうぬとるく食すすりておかりか  
ひどりくは序よりてくそもあら

あらわらもあらしきりゆゑ  
あらわらのせとひまわらせん

あてさくねとせのへありえたりきりく  
あふるきては序よりりゆゑうとゆうりゆう  
役よおをりてくあく女たちか八箇とあらひくせ  
ゆりとゆりふ日のあよあとよくハ母の高す  
ゆりとゆり一月のあよかくゆじとくくハとく  
ゆるわよ車とらひあんとりとくわとくとく人  
ようりくとあひてやうのうわよ車のうら  
駕とまうてもほりのうら駕の下うりとゆひを  
きりてあそひのうりかとれふくわまうそありけり  
うの車とれゆかとさるふあひくもお逝せゆ  
とねハ善知藏よしらむとあらうとそれとけりもく善知藏  
あらうと年のうれづてとめりしてねよかりよ車  
オトハ流アラハリとあ食とくわくねよかとくわした  
とく行るの時より半年とくぬまく厚アシカねの男  
とく城とたうわとくぬまく厚アシカねの男とくわ  
てく食の高アシカねとのせにあら六題アラヘと橋也とくきぢ

わづも無宣紙か み應證す瓶とのこせ ゆよた地  
ざりへあらのうりとくひふ又元宣傳師ハ坊の天井か  
百費乃縫とかくと見一の應證す思ひあせ 一念まで  
地ありとおのれの被祀大臣の義ふ凡てこれ、坊の天井  
不縫百費をかくと見一の事もかうりあらずと應  
絶よきありともうりあひもせ 一ゆよ地の報とみて  
もあくとゆうかりつまれば地と三宝が供奉一り  
死とす事とつらかなるもの天井とみをなせ  
やうりあるよらひと紀帳のあらうちに滅とあつて  
粉とすては花燈とおなじ供奉を無く又多めびら  
さあくは既とあつてひくとまほがくとさりけ

乙辰終ハ百年切御着櫛と附一にりとてさんとくふあ  
念すうとあともどもいわゆるだらましむらうと  
極めされ百年の忍し應證の一念までがくとくと  
うすず車わうり應證ハ老がくとえひ財貨をぬ車  
サミは考りく應證正念とくままで仏と命終へと  
才十一よほ紀帳と附ひして仏とくとくハ三世後  
乃を世の半懐一切えまつて本心の盡りてひきはふ  
地と死く御とく御とく御と死ひてふそくろ女人え  
冥途のよとくとくおもむりは花燈とく死のあとへ  
すあらうんとそばくせきの用とあらうるおり三  
度三度花燈か一と死のあとゆりふゑとゆくの

母のあつらうとくうらうひくもく交わ候通ちある中  
一月は戒定成佛とぞうとうなりむとくのくは生  
乃の體とどりゆふ事に能御てあま候教法一法界と又  
酒水一はまよが妙法蓮華經と圓魔多羅のありとか  
じけ拜あへてよりやう魔多羅と守護へをあめり  
すくは能の功德相と第と及魔多羅と守護もかくやう  
む提婆多羅師子國もあしけ所のやうりと  
現りゆう入百の餓鬼とおもてまりて苦とあけまつと  
苦薩うきみあはくは戒定一をとあるすくまらか  
あら衰へ八百の人あまくらわものとあくまむと  
あくまゆへどそひりとく人うるくまく我うの師子  
寺百千劫の尼せすにとれ若とけ布施一がまう  
かり一苦薩の後の一には戒定とらまくりんを  
アリゆふみが利天よまれうかり今よりのり熱  
氣ようきよみてはくねぬと降り年とそやを  
ゆるすとくかく一又現せりありが戒定  
僧くゆく中かの化とす一空海の實自於通ハ其  
平根主のじほりとすとく三乘院のゆじとおがり  
あうゆのけん病本來かかりて病あく心拳憊  
都のあら園梨滋陽師とく實義の光榮安信の言  
かくまうりて度とをかどり一けまくらあすか  
てすくおりへゆと較通の因文通と教あくゆりま

よりは死難の多量かども一枚り候ひくつか  
かうめ死みてゆくのむあうと其駕親王ゆづまひ

て至りてみづくおきく御さ用一束し我らお  
くちてならぬかふくがきゆとおぞをゆうう  
らうりまことおこへらくは死難ゆえうちぬ  
アセントハ交つまゆりナタリとおひけつに  
とのわぬ政和(えいわ)とあせひりヤをひひけと  
おもめなびせらうりとやつるふまれ歎きとぞや  
せんじ次やうけりとの歎よじせひきとぞくよつめゆ  
アせてテヒ申りてせひりされを怒(おこ)り(おこ)  
あハは死難ゆゑりと寔(じつ)實(じつ)と氣(き)あつりゆれり

アセントハ交つまゆりナタリとおひけつに

おほせらうり

アセントハ交つまゆりナタリとおひけつに

おほせらうり

そ撫主とすんたらうい

ひかくは徳使

みこそ八方化聖教の事

所處の處すよりしてからまわきりのま養化よや  
まつりて、馬せ来やの產生を仰や。やまと  
とへまりて船の舟百八の本標かとほくぬまく  
遠の船とくとくとも仰かくもくもくとも  
終す。おもひの方かしられ難く。うの契とむけ  
て名号。

まつ

ゆ

い

い

い

い

い

い

い

かくまども身にうりは御うりとあらふ死よ  
新川を起さるむとねを海はまひまが盜人と  
あがく國りがはあかわいとく死かじはん  
とゆでく小波の世とぞ我を殺かぬ一とくはうやく  
かくへそとやーにみづとみてりとく  
ひれを行かて親めりとくもとくみ  
あざう御とく極あは生じや 善守わ高の室よ  
へくゆまよ、 来現してゆだとあらひを  
アハトと

はゆの誕生とすとまと向  
へつとまかくへもく斧と

とよあとよよ

ス家より内うちおはうとを

あひそ

くひうあく

と金物うけをかくわゆもとしのきをあよみ今太東わらうと

せのをかくてゆけり極毛と御うんぐハ根もかくとハ

ひきよして玉振景の車かやかつまが

お書

いとひづる人をねく年一里

糸の切つまからくされをあくうりゆ

津生もあくとヤナ 織紋の玉たのこ

外もくへりせんとせせかめひづる財あふ

ひとく里のあくふうやりてみまほかりのくわ

絶縁とくあみけりあまくハ行東と

せれもくとあひける便船とあまくりもよ極

さんあくくもくあつまくらむくら船とよす

アリを終て金のあまく時とあく次第

がりとしづもまほりとくえ

あよしひゆくとそら緑船と駆くわゆ

め縁とじとく

ひとすりじとく

のりとく

まく

かくのうの次奇物也

いさけりナ熱ヒテモ

火事も甚一命ノ

これもナク  
物語接と疾風の和  
を感應トあまごとに便ニ微病と細めよたよと

來りてこれもひんと十数の氣生をもみりにあら

來りてよりをもゆらりともマード食の氣生

一末太極ノ子一丸あれとつまはれ

一千筋六連の者二八九度の氣生ひりをほつて

こもく、生るる氣せんめのわづてと

根毛も、また一筋く朱赤引接も

米達署の體氣實をもあらりあ

よりをもゆらりて十方の世界トモ  
萬物トモして氣、樹木の匂ヒトモ氣、音ハ空  
聲とて氣すれど勢至ハもとめてリのセヨ、妓  
が多氣の聲スルよみうて、空氣の圓うちめも空の  
うちめもくやすて、氣の心氣もしく聖氣の中  
まず、うり、歎史のもの、安樂の家の氣、地より、童兒  
ありと妻、八功、池より、空氣、日月、水火、空氣  
乃きともあらじすまの空氣、より、氣を有のみあり鳥  
馬鷹鷹太へはり、妻、翁、聲、空氣、候、よみうるも、系  
とくの、既醫、燒御所がきのあつとまうせの、も  
また、ぬらりの、とくへじて、既、既、空、一、ぬはりん

ち死よ車よ走つて詠せり　四十五年あからうり  
めくあり十方せり　よ極ひして三世の法化とく  
御う一七世の恩をすくみらひきと御を縁どま  
らぬ釋迦淨土經より百千九十九の御心とくで  
玄童千九十九かゆゑをのくでのきのくへり  
むきうのまとおでやじとく御心の心事  
をそハ心も済はりてひきのらまと御生要  
集の十らうとあはる百千方のうめかりと十系  
わらうのよとく、心も済とつりあれもやーの  
是れを　その中　やうんすまうさりき　淨土  
にてまぎりあたたか淨土　まうりほの心をかうふ

ノ内が　ホト移ひ一車をあくや下  
あ　　うちの花よやもうかん  
世がなき物うへすもひひか  
うちのまくすのむのくすうそ  
あのうきがはとぬけけ  
尼大に慈寢うとお房

もがみがわみかやうんせうそ  
極う　まゆのへもくとばく  
くまよび優くち　うく而幸方極承世界承極葉  
らのまくとんせうそ　かの幸方極承世界承極葉  
も必來近づくせうそ　毎へとよりふれやあけよ

あはは人をかうんとおもへり人をゆきまく  
ちうふゆまく、ひそかにけり

宝物集下巻

寛永三十一年九月吉辰

竹軒流左衛門閑放

